

**文庫あれこれ**◆文庫の日には、Mさんが、お庭の花々を摘んできて飾ってくれます。トイレに入った方は、いつもよい香りのかわいい花に気づかれることでしょう。先月のアートフェスティバルには、加えて、Nさんの奥さまが丹精のバラを活けてくださいました。また、Oさんはジャスミンの花束を。撮った写真を不手際に取り込めなくてお見せできないのが残念です。◆梅雨に入りました。タベ東京ではすごい雷でした。今回は、東京で文庫便りを作っています。◆今年は、雨季の前から、アジサイの色の様々が、目に飛び込んできました。青、赤紫、紫、うす緑、私の好きな白…。そしてクチナシが咲きはじめたら梅雨があける、と、どこかで読んだ気がするのですが、梅雨入りした途端、今度は駅への行き帰りに通るおうちの生垣の、クチナシの花の白さが胸を打ちます(匂いはまだ浅い?)。◆村上春樹の『1Q84』売れてますねえ。今日、町田文学館で安房直子「青い花」(アジサイのこと)を語りました。若い傘屋の作る青い雨傘がなぜか、売りに売れます。が、やがて、デパートの傘売場で売られるレモン色の傘にとってかわられる話(おはなし自体は、とても不思議なしっとりした話)なのですが、衆人は、流行に躍らせる(踊る?)のが好き。そして、村上本、注文してしまったそのひとりの私です。みなさん、読んでください。読みごたえある物語だとよいですね。◆『朗読者』(愛を読む人?)が封切。観たいと思いながら横目でポスターながめて文庫にまいます。◆目で読む喜びも素晴らしいですが、耳からの文学もぜひお楽しみください。まだいらしたことのない方、「海の日のおはなし会」に、ぜひおでかけください。◆雨の恵みを受けて夏を迎えられますよう。(西村)



“ “これからの催し物のお知らせ” ”

## ★海の日のおはなし会 No. 9

～おはなしと音楽のタベ～

日時 7月19日 夕方5:30～7:30  
 会場 伊豆高原駅大クスノキの下  
 対象 小学校中学年以上から大人まで  
 参加費 無料  
 語り手 海の日のおはなし会メンバー&ゲスト  
 音楽 AKINO(今回はデュオで)  
 主催 伊豆高原・海の日のおはなし会世話人会  
 (代表 沙羅の樹文庫・西村)  
 後援 伊豆急行株式会社

## ★沙羅の樹文庫開館3周年記念おはなし会

7月20日(月)10:30～12:00(文庫で)  
 子どもからおとなまで、会員でない方もどうぞ!

☆☆今後の開館スケジュール☆☆

◆7月は、第3土日(18、19日)です。

20日(海の日)はおはなし会のみ。おはなし会参加の方のみ終了後本の貸出し有り。

◆8月は変則です。13～17日(木～月)まで開館。全日10:00～15:00(土曜17:00)

◆文庫の時間：土曜日は午後2時～5時、日曜日は午前10時～午後3時

◆毎月開館日の日曜日には、「子どものための小さなおはなし会」があります。午前10:30～11:00

♥文庫開館日は毎月、第3日曜とその前日の土曜日の2日です(従って第3土曜日でなく第2土曜日ということもあります)。

《楽しんで読み聞かせ・頑張っておはなし》  
 みんなで勉強会(おはなしの会・沙羅)

★次回は8月15日(土)です。

# 沙羅の樹文庫便り

No.34

(2009年6月号)



あぢさゐの

下葉にすだく蛍をば

四ひらの数の添ふかとぞ見る

(藤原定家)

今年は空梅雨? 今ごろは、ホタルがたくさん飛んでいるのでしょうか。一昨年、池で、幽玄なホタルの世界を体験しました。

そして文庫のお隣では、きっとビワの木が可愛い実をたわわに実らせていることでしょう。

月日が、矢のようにとんでゆくように感じるのは私だけ? まもなく、夏の訪れ。

かぜとなりたや  
 はつなつ  
 かぜとなりたや  
 はつなつ  
 うしろよりふく  
 かひどの  
 まえにはばかり  
 かひどの  
 かぜとなりたや  
 はつなつ  
 かぜとなりたや  
 はつなつ  
 吉田温子

連絡先：沙羅の樹文庫

電話 0557-51-3737

## 子どもの本の紹介

★大人の人も読んでみてください!★

「殺人者の涙」(アン＝ロール・ポンドゥ著 伏見操訳 小峰書店 08.12)

いきなり目の前で両親を殺されてしまったところから話しが始まります。場所は「チリの最南端、太平洋の冷たい海にノギリの刃のように食い込む地の果て」の荒野にある農場です。そんな想像もつかない荒涼とした土地で殺人がおき、そこに住み着いてしまった殺人者一人残された子ども。

読み進めようかどうかとためられるような始まりですが、(私は殺人事件それで始まる推理小説、好きではありません。) 救ってくれたのは、書名の「涙」です。結末までいってみなければ・・・そんな思いで読みました。

その殺人者と子どもの二人は、何も無い、ほとんど誰も来ない所で、作物をつくり、屋根を治し、ニワトリを飼って生活し、毎日が過ぎていきます。そんな生活を続けていると、殺人者は「自分はなぜ今まで盗んだり、人を殺してきたのだろう。」と思うのです。だれも傷つけず、生きるために自然や季節と闘って暮らしていくのは、こんなにも簡単なのに。子どもがひとりいるだけで、こんなにも喜びを感じられるのに。彼らはたくさんの喜びや悲しみを感じて暮らしていきます。

そこにもう一人男がやってきて、同じ場所に住み着いてしまう……。彼は男の子に詩集を読んでくれるのです。男の子はことばや文字を覚えていく。

ここまではまだほんの始まりです。いろいろな人々が関わってきますが、私はその終わり方に少し不満が残りました。もっと違う終わり方がなかったかなあ・・・なんて。死んでほしくない人もいました。(最後のほうで出てくるリカルド。森の中で仕事をし、家には大きな本棚があっという間の本がならば、バツハを聞かせるのです。)

風を感じ、緑の山々と空、海をながめ、大きな声で歌い音楽を聞き、庭の草を摘んで食べる。ここ大室で暮らす小さなしあわせが、人生の終わりまで続いたらいいなあと思いつつ読みました。(中西 景子)

今月はこんな本を発注しています! 間に合えばよいのですが…。

### ～大人の本～

『1Q84 Book1,2』(村上春樹著 新潮社 09)★

『あなたと共に逝きましょう』(村田喜代子著 朝日新聞出版 09)

『手紙—親愛なる子供たちへ』(樋口了一著 角川書店 09)

『何もかも憂鬱な夜に』(中村文則著 集英社 09)

『奇縁まんたら 続』(瀬戸内寂聴著 日本経済新聞社 09)

『バリデギー脱北少女の物語』(黄晰暎著 岩波書店 08)

『三人姉妹』(大島真寿美著 新潮社 09)

『小林多喜二』(ノーマ・フィールド著 岩波書店 09)

『暮らしのヒント集』(暮らしの手帖編集部著 暮らしの手帖社 09)

『リンゴが教えてくれたこと』(木村秋則著 日本経済新聞出版者 09) ほか

### ～子どもの本～

『翔太の夏』(那須正幹作 スカイエマ絵 09)

『あの犬が好き』(シャロン・クリーチ著 金原瑞人訳 偕成社 08)

『リンゴの丘のベッツィー』(ドロシー・キャンフィールド・フィッシャ著 多賀京子訳 徳間書店 08)

『漂泊の王の伝説』(ラウラ・ガジェゴ・ガルシア著 松下直弘訳 09)

『魔法の館にやとわれて』(ダイアナ・ウィン・ジョーンズ作 田中薫子訳 徳間書店 08)

『コンチキ号漂流記』(トール・ハイエルダール著 神宮輝夫訳 講談社 1978)

『世界がぼくを笑っても』(笹生陽子著 講談社 09)

『ぼく、およげないの』(アンバー・スチュワート文 レイン・マーロウ絵 ささやまゆうこ訳 徳間書店 08)

『おすしのせかいりょう』(竹下文子文 鈴木まもる絵 金の星社 09)

『むこう岸には』(マルタ・カラスコ作 宇野和美訳 ほるぷ出版 09)

『いつもぶうたれネコ』(きむらゆういち作 エムナマエ絵 童心社 09)

『おとうさんのちず』(ユリ・シュルヴィッツ作 さくまゆみこ訳 あすなる書房 09)

『6わのからす』(レオ・レオーニ作 谷川俊太郎訳 あすなる書房 09)

『きんぎょ』(ユ・テウン作 木坂涼訳 セーラー出版 09)

『雨をよぶ龍 4年にいちどの雨ごい行事』(秋山とも子文・絵 童心社 09)

『野うさぎのフルー』(リダ・フォシェ作 フェーデル・ロジャンコフスキー絵 石井桃子 童話館出版 02)

## 何ともいえない心地よさ 一沙羅の樹文庫一

小川 悦子

●1985年にセーラー万年筆の出版部門としてスタート、海外絵本の翻訳出版をつづけているセーラー出版を昨年退職いたしました。●ことし5月、在職中たいへんお世話になった西村敦子さんの“沙羅の樹文庫”で、伊豆高原アートフェスティバルに合わせたミニ原画展とセーラー出版の絵本フェアを企画してくださったので、たのしみにお伺いいたしました。●西村さんが長年の夢を実現なさった文庫は、モダンでしっとりとした木造建築。庭に大きな枝をひろげる姫沙羅の見える図書室は、何ともいえない心地よさでした。●絶版で本社にもない絵本が文庫にはたくさん揃っていて“本”はこのように、たとえば自分がいなくなった後もどこかで読まれていくのだなーと感謝いたしました。●当日はボランティアの応援のみなさまともお話しできて幸せでした。文庫が地域のみなさまに本当によるこばれていることがよくわかりました。ご発展を心からお祈りいたします。

### ●小学校高学年向き・ミニブックトーク● 夏・平和を考える (今回買った本のなかから)

『いつもぶうたれネコ』は自分の不運を世の中のせいにしてきた。でもあるとき、家族からおいてきぼりを食ったこねずみと出会って…。農夫は自分の農場に住み着いた『6羽のからす』としょっちゅう喧嘩。どっちも引けなくなった時、その一部始終をみていたふくろうが仲裁を買って出た…。川をはさんで異なる人々が住んでいた。『向こう岸には』行っただけいけないと云われた女の子は、ある日、むこう岸に住んでる男の子が流したボートに乗って、むこう岸にわたる。むこうの家族を知った女の子は、わたしたちと、ちがっているけどにていると思う。そして、大きくなったら自由に行ったり来たりできるように川に橋をかけることが、ふたりの夢になった…。戦争で焼け出され、祖国を追われ、食べ物を持ってくるはずのおとうさんが、代わりに買ってきた『おとうさんの地図』が僕にあたえてくれたもの…。最後に『最後の授業』(ドーデー作)を読みます。

個人的平和、民族としての平和、国の平和は、すべて、ひとりの勇気から、賢明さから、自分と同じに人を人として受け入れる心から始まり、いつでもどこにいても、自分を見失わないことで、未来が拓けていくことをいっしょに考えます。(沙羅)